



## 活動報告

### 金沢景子モダンダンスステージⅢ

2007 年 12 月 16 日(日) 県民小劇場

「風」「まわるたま」「壁を通りぬけるもの」「紫のとき 藍のとき」

時間の経つのは早いもので、リサイタルをさせていただいてから3ヶ月が過ぎようとしています。反省をする間もなく次々と公演があり、今は創作実験劇場のレッスンに追われています。その各作品の振り付けや、練習をみて思うことは、みな、素晴らしいダンサーであり、作舞者だということです。こんな仲間や、先生達が総出で取り組んだりリサイタルなんだから、きっといい公演だったに違いないと思いたいです。本番直後、踊り終えた仲間の満足そうな姿をみて、まずは一安心。まずダンサー1人1人が“踊れた～”という実感があってこそ成功です。お陰様で足の怪我、体調不良も全員クリアして踊ることができました。ありがとうございました。私自身は、心地よい緊張の中、それぞれの作品を、一瞬一瞬、存分に楽しんで踊れたような気がします。

佳代先生が創って下さった「紫のとき 藍のとき」の3楽章、夜明けの白い精霊に囲まれたとき、なんともいえないやわらかい高貴な光を感じて、いま、まさにここで踊らせていただいているんだ！と喜びで涙が出そうになっていました。取り囲んでいたダンサーに神様が降りて来たようにも感じました。こんな私の感動がお客様にも伝わっていたら本望なのですが…。「壁を通りぬけるもの」「風」「まわるたま」3作品とも再演出での再演でしたが、創作実験劇場で、創り貯めた作品をより深められることができたことは、私の心の鍛錬になりました。本当にたくさんの方々を支えられて会を終えることができましたこと心より感謝申し上げます。そして、これからも生徒みんなの成長と研究所の活動を、末永く見守って下さいようお願い申し上げます。ありがとうございました。 金沢景子

「まわるたま」…舞台上に見えたもの…

景子先生のリサイタルから二ヶ月経ちました。日の光は明るさをまし、立春を過ぎてからの雪に凍えそうになっていてもスイセンの蕾も桜の梢の花芽もその時を待っています。いつもの毎日を繰り返しているうちに、やり過ぎたり、見過ごしたり…でも本当は、私たちは日々なんとたくさんの生命に囲まれて暮らしているのでしょう。時間は確かに向こうへ向こうへと延びていきます。でも一つ一つの生命は、心臓から血液が送り出され身体の隅々にまで運ばれ、また戻っていく循環運動の連続です。そして、無限とも思えるたくさんの生命、近づいたり離れたりぶつかったり繋がったり重なったりしながら、その鼓動と呼吸が時を刻んでいきます。

舞台上のダンサーの呼吸といつの間にかシンクロナイズしている自分自身の呼吸に気付いたとき、まるでシャボン玉のようにストローの先から徐々にふくらんでまあるくなった「祈り」が、ゆっくりとかすかに揺れながら一つまた一つと空中に漂い、輝きながらまわりはじめました。プログラムに引用されたタゴールの詩の世界が、豊かに静かに柔らかに透明に表現された踊りに心が満たされました。 村上由里

すでに発表された3作品の再演。「風」は故人のそこはかとした気配に、「まわるたま」は自然の森羅万象によって、自分が生かされていると感じる。「壁を通りぬけるもの」では見えぬ壁に悩み自問する。壊れそうなほど繊細で、敬虔な心映え。新作のような緊張感がある。

金沢景子もダンサーとして加わった藤田佳代の新作「紫のとき 藍のとき」は、夕暮れから夜明けに至る心象風景を描いている。暗闇に怪しく重く足を引きずり、曙光に鳥のように躍動する。生命の営み、深みをのぞかせた趣がある。音楽も衣装もユニークで、象徴詩的な舞踊になった。

(白石裕史 『関西音楽新聞』2008 年 2 月 1 日号より転載)

スローダンスの真髄 金沢景子の三作品

藤田佳代舞踊研究所モダンダンス公演《金沢景子モダンダンスステージⅢ》が、金沢の『風』(2006 年 3 月初演)、『まわるたま』(2007 年 3 月初演)、『壁を通りぬけるもの』の三作品と藤田佳代の新作『紫のとき 藍のとき』により行われた。金沢が最初に独自の公演を行ったのは、阪神大震災直後の 1995 年だった。第2回が 2001 年で、今回が 6 年ぶり三回目となる。藤田佳代舞踊研究所では、寺井美津子、菊本千永、かじのりも交替で《モダンダンスステージ》をやっている、その年々の切磋琢磨のありさまを見ることができる。

今回の金沢の三作品を見ると、まじめな舞踊への取り組みがようやく花開いて、彼女ならではの作風が明らかになってきたという感じがする。「風」には女性7人が登場する。一人が舞台を駆け抜けるので、それが風なのではないかと思うが、後からゆったりと現れる他の六人のほうが風なのだ。この作品には、そんなに急がないでゆとりと風に身を任せたらどうですかと言いたげなメッセージが込められていて、藤田佳代譲りのスローダンスの真髄を見ることができる。『まわるたま』は女性五人の踊り。ビバルディの曲を使いゆるやかな動きを続ける。彼女の創作の姿勢はここですっきりと明確となっていた。そして『壁を通りぬけるもの』では五人のダンサーに特長のあるポップな衣装を着せ、それぞれ個として扱った。金沢はもうひとつの方向も模索しつつあるようだ。

藤田佳代の『紫のとき 藍のとき』は、最初が「紫のとき 藍のとき」、次が「紺のとき 黒のとき」、最後が「紫のとき 白のとき」と三つのパートから出来ている。その大らかに展開する群舞の扱いのうまさにはさすがだ。あっという間に癒しの世界が広がるのだ。他に較べると、高齢の人、男性の目立つ客席が、彼女のダンスの特質、歴史を語っているようだ。(山野博大 『週刊 オン★ステージ新聞』2008 年 2 月 8 日号より転載)

12月16日、景子先生のリサイタルに立たせていただいていたありがとうございました。

佳代先生の作品「紫のとき 藍のとき」2楽章を踊らせてもらいました。今回の舞台ほど集中して踊ったことはなかったように思います。それまで“樹霊”は何度か踊っていたので、今までどおり出来ると思って練習を始めたのはいいものの、メンバーが変わり、いくつかの振り付けが変わってしまったのでほとんどゼロから始めるような気分でした。より良い作品に仕上げることが大切なんだなあと思いました。さらに、本番の2週間ほど前に練習中に足を捻ってしまい、練習が出来ない状態になってしまうなど困難が多かったように思います。練習が出来ない間は他のメンバーが踊っているのを見て頭の中で振り付けの復習をしていました。本番の時には足は治り、踊りきることが出来て本当によかったです。それにチラシの製作もさせてもらって、この公演に広く関わることができてよかったです。 TERU

第 33 回こうべ芸文美術展

2008 年 2 月 9 日(土) 兵庫県立美術館 原田の森ギャラリー本館

「黒と白のエチュード」「doppelgänger」「石の魚」

パフォーマーズ・フェスティバル

2008 年 2 月 17 日(日) 県民小劇場

「黒と白のエチュード」「doppelgänger」「石の魚」

## 今後の予定

### 創作実験劇場

2008年3月22日(土) 県民小劇場

寺井美津子「埋み火」 金沢景子「おどり場」 菊本千永「memories」 向井華奈子「満ちる刻—マッチ売りの少女の場合」  
藤田佳代「ハスミ in Autumn」 かじのり子「コピー」 灰谷留理子「残された記憶」  
萩原陽子「キツネノヨメイリ」 鎌倉亜矢子「Stargazer」 藤田佳代「ひびく」

現在、創作実験劇場のリハーサルの毎日です。どの作品も仕上げの段階までやってきました。それぞれに特徴のある作品ばかりで、面白い会になると思います。なかでも藤田作品の「ひびく」は、大きく二つの特徴があります。一つ目は、音楽です。音楽は丹生ナオミさんの作曲によるもの、そして当日は丹生さんと加島裕子さんによる生演奏です。もう一つは最後の4楽章で小学校2年生以下年中以上の子どもたち9人が、アシビの鈴の精となって登場するという。1月12日の土曜日からリハーサルがスタートして、全員一回も休まずにがんばってくれています。振りもさることながら、音楽もおそらく「こんなん初めて」というようなものばかり。でも特訓の甲斐あって、本番が楽しみだな、と思えるくらい踊りになってきました。この子たちを応援する意味でもどうぞみなさん、ご来会ください。

### 丹生ナオミさんと加島裕子さんに聞きました

純粋な音楽の鑑賞とは異なるかもしれませんが、ダンサーとしての立場で聴かせていただいた印象を紹介します。「ひびく」は全部で4楽章から成り立っています。1楽章は、死者の生者への賛歌。出だしの低音がとても印象的です。2楽章は、花が空へと放たれるよるこびの歌。ピアノの単音がまさに、花びらがはらはらと空に舞うそのイメージ。1楽章と2楽章は死の世界へシフトするもの。3楽章になってがらりと印象が変わり、少年の足音になります。そして一気に生の世界へとジャンプして、4楽章の生きている側からの死者への子守唄へとつながります。4楽章は死と生の境界を出入りする印象があります。作曲家の丹生ナオミさんと当日丹生さんと一緒に演奏して下さる加島裕子さんにインタビューさせていただきました。(以下、丹生さん…丹、加島さん…加)

・丹生さんにお伺いします。佳代先生の作品の作曲は2回目になります。前作「震える木」はずばらしい曲でした。曲自体の評価も高かっただけに、今回の「ひびく」、おそらく無心で作曲された前回と違ってやりにくい点などあったのではないのでしょうか。いかがでしたか？

丹: 苦労ということであれば前回のほうが精神的に大変でした。これまで書いてきたコンサート作品のほとんどが15分以内のものがほとんどでしたので、30分の長さのものが書けるのかという不安がありました。でも一度挑戦させていただいて、この15分の壁を超えることができました。コンサート作品とダンスのための曲はやはり違います。前回を受けて今回、ダンスのための30分の作品というものにとまどいはありませんでした。でもずっと戦いました。集中力、体力、締め切り、そして要求されている時間との戦い。一年ほど前にこの話をお受けして、何をしても頭のどこかにずっと棲みついている感じでした。ただ、モダンダンスの作曲はずっとしてみたかったんです。モダンダンスと現代音楽なら違和感がなく、お客様も現代音楽をすんなりと受け入れてくれるのではないかと思っていましたので。前回は本当にご一緒できてよかったと思いました。

・ひびくのコンセプトをきいてどう思われましたか？

丹: 自分の中に受け入れやすく、想像しやすい。そう思いました。1楽章の声明にしても2楽章の朴の花にしてもとても。声明なんてしよっちゅう聴いているものでもないのに知らずにそのイメージを受け入れていましたね。

・コンセプト以外に、作曲する上でなにか参考にされたものなどはありますか？

丹: それはとくにないです。

・作曲するにもとっかかりが必要だと思いますが、今回いちばんつかみやすかったのは、どの楽章ですか？もしくはどういった部分ですか？

丹: やはり2楽章の朴の花が空に放たれる場面です。3楽章もこれは速い曲にしようと思っていました。

・3楽章が一番最後にできあがったそうです。確かに2楽章で一つの世界が完結するような印象があり、それをくつがえすパワーが3楽章には必要だったのではないかと、などと考えてしまいますが、いかがですか？

丹: 3楽章に関しては早い段階でイメージがあったのですが、自分の中で曲はできあがっているのに清書が間に合わないんです。なにせものすごい音符の数で。私は手書きなものですから(ここで楽譜をみせていただきました。美しい手書きの楽譜で、確かにすごい音符の数です)。加島さんには練習してもらわなければいけないので、3楽章の清書は後回しにして、1楽章と2楽章と4楽章を先に送ったんです。

・加島さんにお伺いします。曲がどのような形で手渡されるのか知りませんが、最初の印象は？

加: 曲は楽譜で手渡されます。佳代先生の作品のコンセプトが先に伝わっていたので、コンセプトどおりイメージできました。

・全て通して演奏されて、最初の印象から変わりましたか？

加: 印象は今でも毎回変わります。弾くたびにイメージが広がって音と音との間に何かが現れてきます。今回はダンスのための曲ですので時間を計って演奏するので大幅に演奏が変わることはありませんが、その中で響きや音色を工夫しながら演奏したいと思います。自由に弾いてよい場合は、その空間にあった「間」が変化してくると思います。

・お二人にお伺いします。踊りを観ていかがでしたか？曲だけを聴いているときと踊りがあって聴いているときとは、曲の印象は変わりますか？

丹: 踊りと音楽が一緒になると1+1=2という単純な答えではなく、それ以上になるという感じがしています。

加: 音だけではイメージできないものが踊りにはあります。思いがけない動作があったり。3楽章があんなにたくましくなるとは想像していませんでした。

・小学2年生以下の子どもたちが最後の章を踊ります。3拍子や4拍子の拍子の決まった曲とは違い、決して踊りやすい曲ではないのですが(あくまでもカウントを考えた場合に)子どもたちはよく踊っていると思いますが、いかがですか？

丹: 一生懸命で可愛かったです

・今後のご予定は？

丹: ハスミ in winter を作曲します。(丹生さんがいたから、ハスミちゃんの作品は四季で行こうと思いました、と佳代先生)。

加: 11月にエリザベト音楽大学で演奏会をします。2台ピアノと打楽器による演奏です。弦を弾いたり、声があったり、現代音楽の演奏会です。

・今日は本当にありがとうございました。

### 第2回こうべ洋舞トライアルステージ

3月26日 神戸文化中ホール 「光射すほうへ」 振付 かじのり子 出演 西津華世

### 春休み子どもアートフェスティバル ゆめのはこ 2008

3月30日 兵庫県立美術館 原田の森ギャラリー—西館

「おどり場」 「memories」 「満ちる刻—マッチ売りの少女の場合」 「コピー」 「キツネノヨメイリ」 「stargazer」 「ハスミ in Autumn」 ほか

### 第21回こうべ全国洋舞コンクール

4月26日 神戸文化中ホール 「満ちる刻—マッチ売りの少女の場合」 「コピー」

### ひめじ菓子博 白鷺城フェスティバル in PEACE

4月29日 姫路城三の丸広場 「cuddle me」 振付・出演 菊本千永

県民小劇場はわれわれの育ての親…のような劇場です。来年度いっばいで取り壊し、再建はなし、となりました。時には反抗期をむかえさんざん悪口を言った県小ですが、そうなるとなんともいとおしい劇場でした。兵庫県の財政は、かなり厳しいらしいです。他府県のことになりますが、先だって大阪府に新しい知事が誕生しました。知事は「収入の範囲内でやっていく」「無駄を省く」と言っていました。当然そうしていただかなければいけないのですが、無駄…って。どの部分？どうか、文化と福祉ではありませぬように。

責任編集 菊本千永